

Title	『ここがヘンだよ日本人』：分析枠組と番組の特質
Sub Title	"Kokoga hendayo nihonjin (This is a strange country you Japanese live in)" : analytical framework and outlines of the program
Author	萩原, 滋(Hagiwara, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2003
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.53 (2003. 3) ,p.5- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20030300-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20030300-0005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『ここがヘンだよ日本人』： 分析枠組と番組の特質

萩原 滋



テレビが描き出す世界は、現実を反映すると同時に、現実世界に関する人々の認識を規定する。こうした前提に基づきGeorge Gerbnerたちが1960年代にペンシルバニア大学で開始した「文化指標プロジェクト (Cultural Indicators Project)」では、テレビ番組の定期的な内容分析を通じてテレビが提示する世界の特徴、現実との隔たりの大きさや逸脱の方向を把握したうえで、それに関連する現実の諸側面についての人々の認識を不定期に調査して、テレビ視聴が人々の現実認識に及ぼす影響の検討を試みている。前者は「メッセージ・システム分析 (message system analysis)」、後者は「培養分析 (cultivation analysis)」と呼ばれており、培養分析での調査項目は、メッセージ・システム分析の結果に依拠して作成されることが想定されている<sup>1)</sup>。Gerbnerの当初の構想では、個々の番組やジャンルではなく、アメリカのテレビ番組全体に通底するイメージ、事実、価値や教訓の支配的パターンの解明をメッセージ・システム分析の課題としており、従って培養分析においても、特定の番組やジャンルの視聴量ではなく、テレビというメディア自体との接触量を説明変数としている。

しかし、すべての番組ジャンルに共通に適合するような分析枠組を設定するのは不可能に近く、実際には秋のシーズンの1週間に全米3大ネットワークで放送されたドラマ (アニメや映画を含む) に対象を限定して、1967年以来毎年、同じ枠組に基づく分析を継続している。また、その内容も、暴力描写に関するものが中心になっており、従って培養分析を行う際にも、暴力に関わる現実認識を調査することが多くなっている。たとえばテレビの中では暴力的な犯罪や事件の出現頻度が実際以上に高いという分析結果を踏まえて、テレビの低視聴者 (1日平均2時間以下) と高視聴者 (4時間以上) の現実認識を比較した場合、後者の方が暴力犯罪・事件の発生率や刑事・警官・犯罪者の割合を高く見積り、さらに暴力に対する不安や他者への不信感の表明が多くなることが明らかにされているのである。このようにテレビを長く視聴している者ほど、テレビで描かれた世界に近い現実認識を示すことを「培養効果 (cultivation effect)」としているわけだが、最近では暴力犯罪の発生率や法執行者の割合の推定といった「知覚・認識レベル (第1次培養効果)」と犯罪への不安感や警戒心といった「信念・価値レベル (第2次培

● 脚注

1. この2つが文化指標プロジェクトを支える柱となっているが、当初は、この他にメッセージの製作過程での圧力や制約などを検討する「制度過程分析 (institutional process analysis)」も提

唱されていた。しかし、この点に関する研究は、ほとんど報告されずに終わっている。

養効果)」を区別する必要性が指摘されている（斉藤，1992参照）。

メッセージ・システム分析では，個々の番組や暴力場面以外に，登場人物を単位とする詳細な分析が行われており，ドラマの中に現われる人々の性別，年齢，人種，職業などの基本属性の分布や活動について膨大なデータが蓄積されている。しかし，当初から暴力との関わりが重視されてきたせい<sup>2)</sup>，偏見や差別に結びつくようなステレオタイプの構築といった分析の視点は示されていない。その適用領域は，性役割（Gross & Jeffries-Fox, 1978; Morgan, 1982; Signorielli, 1989），高齢者（Signorielli & Gerbner, 1978），職業（Jeffries-Fox & Signorielli, 1979）にも拡張され，また人種問題（Matanabe, 1988），環境問題（Shanahan, 1993; Shanahan & McComas, 1979），政治的志向（Jackson-Beck, 1979; Gerbner et al., 1982）など暴力以外の問題に関する培養分析も行われているが，ここでは主として「主流形成効果（mainstreaming effect）」の検討が行われている。すなわち，テレビが伝えるメッセージの画一性を前提として，テレビ以外に多くの情報源をもつ低視聴者に比べると，テレビ情報への依存度が高い高視聴者の現実認識は，社会経済的地位や居住地域などの個人的属性によるばらつきが小さく，画一性の高いものになる，という現象が取り上げられているのである。多くの人々が共有する画一的な現実認識という主流形成のアイデアは，ステレオタイピングとも一脈通じているが，培養理論に基づく研究では，特定のカテゴリーの人々に対するステレオタイプの形成，偏見や差別に結びつくような現実認識といった問題意識は，あまり前面に出てこない。

社会化の担い手としてのテレビの影響力を重視するアメリカでは，文化指標プロジェクト以外にも，多くの研究者がドラマの登場人物やCMキャラクターの分析を手掛けている。ここでは主として「人種・民族（race/ethnicity）」及び「ジェンダー（gender）」描写に焦点が合わされ，テレビ世界での黒人，ヒスパニック，東洋人などの少数派及び女性の構成比の歪みや社会的役割の偏りが問題とされているのである。たとえばテレビドラマにおける女性の役割について言えば，男性に比して，構成比が小さく，年齢分布は20代，30代前半が中心で若年層に偏っており，結婚状況や子どもの有無が明示される割合が高く，有職者は少なく，職種も限定されており，また既婚者の場合は，仕事と家庭の両立に悩むことが多い，といった特徴が繰り返し示されているのである。これらのステレオタイプの描写は，現実世界での人種的少数派や性役割に関する固定観念，偏見や差別と結びつく可能性があるために問題化しているわけだが，その後は高齢者，同性愛者，障害者などの描写が俎上にのぼるようになっている（Signorielli, 1985 参照）。

アメリカに比べると日本では，テレビ番組の内容に関する実証的分析の蓄積は乏しいが<sup>3)</sup>，ドラマやCMの中に描かれる女性像については比較的多くの研究が行われている（有馬，2000, 2001; 国広，2001; 村松，1979; 村松・ゴスマン，1998; 延島，1998）。一方，日本社会における人種・民族的少数派は，もともと存在感が薄く，何かの折にニュースなどで取り上げられることはあるとしても，メディアの扱いが小さすぎて本格的な分析対象にはなり得ていない。ただ，国内に多様な人種・民族を抱えるアメリカでは「外国人」というカテゴリー設定への動きが鈍いのに対して，より等質性が高い日本では，「人種・民族」ではなく，むしろ「外国・外国人」を対象とする研究の方が多くなっている（Hagiwara, 1998; 川竹，1983; 川竹・杉山，1996）。しかし海外からの輸入番組や外国関連ニュース，スポーツイベントの国際中継などを別にするると，外国・外国人を定期的に

#### 編注

2. 内容分析の結果は，1970年代から80年代にかけて "violence profile" というタイトルのもとに継続して公開されてきた。

3. この点に関してはGerbnerの枠組を日本のテレビドラマに適用し，1977年から94年にかけて6度にわたって内容分析を行った岩男（2000）の研究が目される。

取り上げる日本制作の番組は、数が少なく、ジャンルも限定されている。外国を舞台としたり、外国人が主要な役割を担うような国産ドラマは稀であり、テレビの中の外国・外国人イメージに関する内容分析は、番組ではなく、むしろCMを素材とするものが多くなっている（FCT, 1991; Haarmann, 1989; 萩原, 1994; 日吉, 1996, 2001; 小坂井, 1996）。また日本人タレントの海外紀行や異文化体験、日本語を話す外国人タレントや素人を起用したバラエティ番組が、最近、増えてきているのだが、この種の番組に関する本格的な分析は、まだ手つかずに近いのが現状である。

さて本プロジェクトでは、テレビのステレオタイプ機能を外国・外国人イメージを主題として広範かつ多角的に分析することを目的としており、その素材として1998年10月から3年半にわたってTBS系で放送された『ここがヘンだよ日本人』というバラエティ番組を取り上げることにした。この番組には多数の外国人が出演して、硬軟取り混ぜたさまざまな話題に関して盛んな論戦を繰り広げており、そうした言動を通じて提示される外国人イメージや日本人に対するステレオタイプなどの分析を試みると共に、その結果に基づいて質問紙を作成し、番組視聴経験が特定の国・地域に関する認識やイメージなどに与える影響を調査しようとしているのである。

上述したようにテレビ放送の内容分析は、もっぱらドラマやCM、あるいはニュース番組に限定されており、バラエティ番組を対象とする内容分析は、ようやく緒に就いたところである。地上波テレビの番組編成の中でバラエティの比重は徐々に拡大しており、首都圏の大学生を対象とした萩原（2002）の調査では、各種ジャンルの中で「コメディ・バラエティ」は「ニュース報道」に次いで多くみられており、特にテレビ視聴時間の長い学生ほど、この種の番組を好んでみる傾向が明らかにされている。また2000年11月に日本PTA全国協議会が小学5年生及び中学2年生の保護者を対象に調査した「子どもにみせたくない番組」の結果をみると、その上位をバラエティ番組が独占しており、『ここがヘンだよ日本人』も全体の6位にランクされていることが判明する<sup>4)</sup>。親が子どもにみせたくない番組は、往々にして子どもがみたがる番組であることが多く、その意味でもバラエティ番組が大きな影響力をもつ可能性が示唆されたことになる。

このようにバラエティ番組が、若い視聴者の間で大きな比重を占めているにもかかわらず、この種の番組に関する実証的研究が少ないのはなぜか。137本のバラエティ番組の分類を試みた友宗・原・重森（2001）は、現代のバラエティ番組は、すでに確立された番組ジャンルに入りきらないものをさすとしており、ドラマやニュースのような一定のフォーマットを欠くことが、その分析を困難にしている最大の理由となっているのは間違いない。ただし、すべてのバラエティ番組に共通するようなフォーマットは見つけにくいとしても、特定の番組に限定すれば、独自の分析枠組を設定することができるはずである。

本稿では、まず『ここがヘンだよ日本人』というバラエティ番組と分析枠組について説明し、その結果に基づいて番組構成上の形式的特徴や番組テーマ、発言者の属性などに関する全体的傾向を明らかにしたい。個別のテーマや特定の視点に基づく分析、そして番組視聴効果を検証するための調査については、本特集の別稿で詳しく論じられてい

脚注

4. 小学5年生と中学2年生の保護者の結果を併せると、見せたくない番組の1位は「めちゃ×2イケてる！（フジテレビ系）」、2位は「クレヨンしんちゃん（テレビ朝日系）」、3位は「志村けんのはか殿様（フジテレビ系）」、4位は「稲妻！ロンドンハーツ（テレビ朝日系）」、5位は「笑う犬の冒険（フジテレビ系）」、6位は「ぐるぐるナインティナイン（日本テレビ系）」と「こ

こがヘンだよ日本人（TBS系）」、8位は「生でダラダラいかせて（日本テレビ系）」、9位は「スキヤキ!!ロンドンブーツ大作戦（テレビ東京系）」、10位は「ガキの使いやあらへんで（日本テレビ系）」という具合に、「クレヨンしんちゃん」以外はバラエティ番組が上位を独占しているのである。（<http://www.nippon-pa.or.jp/oshirase/news34-tv/index13.htm>）

るが、冒頭で紹介した文化指標プロジェクト、特に培養理論との関係にひとまず言及しておきたい。Gerbnerの基本構想では、先述した通り、個々の番組やジャンルを越えて頻繁に繰り返されるメッセージを問題としているわけだが、実際の分析対象はドラマにほぼ限定されており、また培養分析では特定のジャンルや番組ではなく、テレビ視聴量を説明変数としている。この点に関しては、ジャンルごとの視聴量を用いるべきだという批判の声が多く挙がっており、またGreenberg(1988)の「ドレンチ仮説(drench hypothesis)」では、それをさらに推し進めて、インパクトの強い特定の番組、あるいは際立った存在の登場人物などに的を絞った分析の必要性が提唱されている。従って、本研究のアプローチは、それを特に意識したわけではないが、GerbnerよりもGreenbergに近いものとなっていることを最初に指摘しておきたい。

## ▶ 1 『ここがヘンだよ日本人』

ビートたけしと日本在住の外国人の舌戦を売物にしたテスト放送の後<sup>5)</sup>、1998年10月にTBSの水曜夜10時からの1時間枠で『ここがヘンだよ日本人』の本放送がスタートした<sup>6)</sup>。日本に長く滞在して、日本語が上手な外国人を多数集めて、日頃から感じている日本人や日本社会に対する疑問、批判、怒りなど思いのたけをぶつけさせ、論客パネラーと呼ばれる日本人を交えてスタジオで白熱したトークバトルを繰り広げる、というのが当初の狙いだったようである。この番組は、結局、3年半の長きにわたって継続することになるが、放送ごとのテーマ、各回のタイトルが決められており、それに関連するいくつかの話題を出演者の発言要旨のテロップやビデオ映像の形で次々と提示して、それをきっかけにスタジオでの議論を展開するというのが基本型となっている。

実際に、私たちは、世田谷の砧スタジオ(TMC)での収録に立ち合ったが<sup>7)</sup>、台本は討論の素材となる発言要旨のテロップやビデオ映像の挿入箇所が指定されている程度の簡略なものであった。収録前に外国人出演者を集めて制作スタッフが番組の進行に関する説明をしているが、議論の方向や内容に関する指示や演出はなく、他のレギュラー出演者やゲストとの顔合わせも行われていない。ただ、外国人出演者数名と制作スタッフが事前に集まって、議論の素材となる発言や番組の流れについての打ち合わせをしており、制作者側は、それをシミュレーションと呼んでいた。スタジオ収録は、通常、2時間を超えており、それを3分の1程度に編集して放送しているのだが、議論が白熱した場合には、1回の収録分を2回に分けて放送することも稀にあるという。

この番組は、江口ともみが司会、ビートたけしが発言者を指名する形で進行しており、放送の全期間を通じてレギュラーとなったテリー伊藤とRIKACO以外のパネリストは、たびたび入れ替わっている。最初はKONISHIKI、次にラモス瑠偉と最初の2年間は、日本に帰化した外国人をパネリストに迎えていたが、その後は日本人と外国人の仲介役となるような人物をレギュラーとして配置することはなくなっている。なお外国人出演者は、名前と出身国、職業、年齢を示す名札の他に、番号札をつけており、その番号で発

### 編注

5. 1997年10月8日に放送された「地球の皆さん大集合! たけしX世界バトル」に引き続き、1998年4月8日にスタジオに150人の外国人を迎えて「たけしX世界バトル かなりヘンだよ日本人」が放送されている。
6. 2001年4月から木曜の夜10時枠に移動した。
7. 2001年7月25日にスタジオ見学を行ったが、この日は「ここがナゾだよ! アントニオ猪木」と「あなたは信じますか? 日本の霊能力3」の2本の収録が行われていた。この頃になるとスタ

ジオでの討議ではなく、実演が増えており、この日も収録前に「霊能力」がテーマだと知らされると外国人出演者の間から不満の声が挙がっていた。ただ、制作スタッフによると、霊や超常現象をテーマとすると視聴率がよくなるとのことであった。このスタジオ見学の実現に尽力いただいた生野慈朗、当日の説明役を務めていただいた石井康晴の両氏(ともにTBS)に、紙面を借りて謝意を表したい。

言者の指名が行われている。

このようにスタジオでの討議を核として番組は構成されているわけだが、それとは別に用意されたビデオ映像を流すコーナーが設けられることも多い。その内容には2つの系統があり、いくつかの国を取り上げて国情の違いを比較しようという趣旨の「世界人間ウォッチング」「世界比べてみよう」といったコーナーと日本に住む外国人の母国や日本での生活や活動を紹介する「人物ファイル」というコーナーに大別することができる。これらのコーナーは、番組開始後しばらくの間は、ほぼ毎回のようには放送されていたが、放送期間の後半に入ると大幅に減少し、最後の1年ほどの間は、スタジオでの討議ではなく、料理や催眠術、気功、霊能力などの実演や「外国人クイズ選手権」「外国人対抗大運動会」など当初の趣旨とかけ離れた企画が多くなっている。

## ▶ 2 構成表の作成

さて1998年10月に開始した番組は、2002年3月の終了までの3年半の間に、通常の1時間枠を超える特番を含めて150回放送されている（巻末資料参照）。ここではビデオ収録に失敗した4回を除く、残りの146回分の放送を分析対象としているが、まず各回の放送内容の時間経過に伴う推移を構成表の形で整理して、その後の分析の基礎資料とすることにした。

その際には、まずスタジオ収録の部分とそれ以外のビデオ映像との区別を明確にし、ビデオ映像については、必要に応じて分節化して内容を要約、スタジオ討議の素材となる発言要旨がテロップで提示された場合には、それを発言者の個人情報と共に逐語的に記録する。スタジオでの議論に関しては、ひとりの発言を基本単位として、発言者の属性（名前、国籍、職業、年齢、性別）と共に、その内容を要約あるいは逐語的に記載、発言途中で他からの突っ込み、罵声、賞賛の拍手などがあった場合には、その旨をスタジオの反応として付記する。ただし、まとまった発言ではなく、罵りあい、感情のぶつけあいといった様相を呈した場合には、そこでの発言を個別に記録せず、誰と誰とが何で対立したかがわかるようにまとめてひとつの単位とする。また、スタジオでの討議ではなく、実演が行われた場合には、ビデオ映像の場合と同様、その内容をいくつかの単位に分けて、適宜、要約することにした。

このように放送内容の流れを、スタジオでの個々の発言を中心に、ビデオ映像やCMも含めて、いくつもの単位に分割して、放送開始時からの経過時間と共に記録する形で構成表が作られているわけだが、そのサンプルを表1に示しておく。なお、構成表作成に際して、発言者の服装や態度などに目立った点があれば、それを記載するようにしたが、表情や動作などの非言語情報の多くは、必然的に抜け落ちてしまう。番組全体の内容を一覧するうえでは、構成表はきわめて有効な道具となるが、映像を文字で記録するには、大きな限界があることも確かである。従って、詳しい分析のためにビデオを見直す作業が必要になることも多いのだが、その際に構成表が見るべき箇所の検索を容易にする道標として有効に機能していることを強調しておきたい。

## ▶ 3 番組のテーマと構成の推移

日本在住の外国人による対日批判を軸としたトークバトルという当初の番組コンセプトが、放送を重ねるにつれてネタ切れになったのか、徐々に変質していったことは先に指摘した通りである。最初の10回余の放送では、スタジオの外国人が提起した日本人や

表1 番組構成表(例) 1998年11月11日 「日本人に言われた許せない言葉」  
 出演: ビートたけし, 江口ともみ  
 テリー伊藤, RIKACO, KONISHIKI, 舛添要一

00:36	オープニング (CG, 入場場面にかぶせてスポンサー名が流れる)	
00:41	たけし	オープニングコメント
00:43	CG	タイトル 「日本人に言われた許せない言葉」
00:44	たけし	指名
00:49	CG	テロップ 「中国には電気あるの?」
01:05	耿忠 (中国 女優 29歳 女)	アルバイトをしていた時, お客さんに「中国には電気あるの?」と聞かれた。ショックだった。それで中国には何も無い, テレビも電話もない, と答えた。
01:06	たけし	みんなそれを信用したんじゃないですか。(笑い)
01:08	テリー伊藤	穴の中で寝ている人もいますよね。
01:14	耿忠	それはすごい山の方です。
01:19	クレメント・アダムソン (ガーナ, 35歳, 男)	縄文時代の日本もそうだったでしょう。
01:22	テリー伊藤	あなたは中国のどこから来たの?
01:24	耿忠	南京です。
01:39	テリー伊藤	中国はすごく広い。あなたは都会出身だが, 田舎の人もいますよ。我々は田舎の人しかわからない。
01:44	耿忠	田舎でも電気はちゃんとあるよ。
01:47		激論
01:51	たけし	電気はあるけど, ランプがない。(笑い)
02:10	余婉齡 (中国 学生 26歳 女)	中国と日本は交流もあるし, テレビでもやっているし, こういうことはだいたい知っている。知っていて, 聞くのはおかしい。今でも人民服着ているの, と聞かれる。
02:11	たけし	意外と知らないよ。
02:32	舛添要一	この前, 上海に行ったら, 3年前とは全然変わった。いろんな国の情報を手に入れるのは無理で, 一般の人々は昔の印象が強く残ってる。
02:39	たけし	中国に電気はあるの, という質問は失礼じゃないと思う。
03:00	ガブリエラ・モラル (メキシコ, スペイン語教師, 25歳, 女)	今は私も怒らない。「メキシコにサボテンは多いのか」, それは当たり前のこと。怒らずに優しく説明したら, その日本人はメキシコに旅行に行く。(拍手)
03:13	耿忠	「電気がない」というのは, 非常識じゃないですか。
03:24		「外国人激論中」のテロップ。
03:26	KONISHIKI	それじゃハワイのこと全部知っている?
03:29	耿忠	あまり知らない。でも素直な気持ちで聞けばいいけど。
03:46	KONISHIKI	今でも電気がないところいっぱいあるよ。でも自分が育った田舎の方は海がきれいなことを自慢してる。
03:49	余婉齡	どうして基本的な生活の基本的なことを聞くの?
03:56	テリー伊藤	(中国桂林のテロップ) ああいうところを見ると, 電気がなさそうな感じがする。
04:00	耿忠	そういう観光地こそ設備そろえてるんですよ。
04:10	RIKACO	もっと心を広く持ったほうがいいじゃない。
04:48	たけし	そういう質問したのは一般の人でしょう。自分がヨーロッパ行って, 映画の取材を受けた時, やくざだと思われた。一般の人, そういう質問はありうるのだ。
05:11	ノイマン・クリストフ (ドイツ 学生 31歳 男)	アジア人の中でお互いに悪い偏見が多い。我々日本人は中国より強いという意味が入っているからとても悪いと思う。
05:47	舛添要一	お互いの偏見をなくすためには, ピザなしに往来ができるようにする必要がある。(拍手)
06:01	耿忠	その時, 自分が気が小さかったかもしれない。このように冷静な場面でいきなりそういうことを聞かれたら, 頭にくると思う。
06:07	耿忠	(テリー伊藤に言い返しながら) 差別の問題もあるから。
06:13	テリー伊藤	シルクロードは日本人にとってはあこがれた。
06:15	耿忠	それは別の問題だと思う。
06:26	テリー伊藤	(中国人に言い返しながら) 上海とか北京に電気がないとは思ってない。
06:50	ゾマホン・ルフイン (ベナン 学生 34歳 男)	秋葉原で「あなたはどこから来た」と聞かれて「ベナン」と答えた。「ベナンはどこですか」と言うので「西アフリカ」と答えると「飛行機も車もないのに, どうやって来たのだ」と言われた。それで「自転車で来た」と言うのと「たいへんですね」と相手は信じた。
06:57		(爆笑)
07:01	KONISHIKI	ダチョウできて欲しかった。
07:12	ゾマホン	94年6月29日絶対忘れない。ベナンから日本まで自転車できたと言った。

日本社会についての問題を軸に議論が展開しており、日本人パネラーと外国人出演者の対立の構図が鮮明に現われている。その中には、日本人側からの外国・外国人批判も含まれているが、1999年に入ると「日本人の大逆襲」というシリーズが始まり、今度は外国人に不満をもつ日本人や外国人に批判された日本人がスタジオに集結して、外国人出演者に論争を挑む形の展開が主流となっていく。それを機に、パネラーの他に、各回のテーマの当事者や関係者がスタジオで討議に参加する形式が一般化していくが、外国人と日本人パネラーの論争という色彩は薄れたとしても、ここまでは「外国人対日本人」という対立の構図が明確に維持されていることになる。

しかしながら、その後、同性愛、女子学生や主婦の性や男女関係、いじめや少年犯罪、教育問題などがテーマとして多く取り上げられるようになると、外国人と日本人の対立という単純な図式が成立しにくくなっていく。たとえば同性愛者が登場した場合には、アフリカやアジアの性的に保守的な態度をもつ外国人と日本人当事者の激しい応酬が呼び物となり、女子学生のセックスや主婦の不倫などについても同様の図式が成立しているのに対して、いじめ問題の場合には、「いじめられっ子対現役教師」「いじめられっ子対いじめっ子」、2000年度には「関西人対関東人」、2001年度の「オンナの顔」シリーズでは「ブス対美人」という具合に日本人同士の対立を軸とするバトルが展開されているのである。また日本のスポーツやオリンピックの問題が何度も取り上げられているが、そこではアメリカ人スポーツジャーナリストのマーティン・キーナートと日本人のスポーツ関係者という形でパネリスト同士の論争が中心になっており、スタジオの外国人出演者が討議に参加する余地が少なくなっている。一方、戦争、国際紛争などの社会問題を取り上げたり、アメリカ人、中国人、韓国人などをターゲットにしたテーマの場合には、日本人と外国人ではなく、むしろ外国人同士の対立を浮き彫りにする形での議論が展開されている。

それでは次に、番組構成の形式的側面から、放送内容の変遷の跡を裏づけてみることにしよう。一般にテレビ番組には、冒頭にタイトルや提供スポンサー、出演者名の提示といった「オープニング」の部分、最後にやはりスポンサーや制作者側へのクレジット、次回予告などからなる「エンディング」の部分があり、その間がいわば放送の中身となっている。この番組の場合は、「スタジオ討議」が主たる中身だとしても、それだけで番組が成り立つわけでは無論ない。まず討議の糸口となるテロップやビデオ映像が、毎回、必ず流されているし、それとは無関係なビデオ映像が挿入されることもある。後者のビデオ映像は、「世界人間ウォッチング」「世界比べて見よう」など各国の人々の反応や国情の違いを比較しようとする趣旨のもの（世界比較）と日本在住の外国人を中心に特定の人物の生活や活動を紹介するもの（人物ファイル）とに大別されることは先に指摘した通りである。またスタジオ収録の場面でも、討論ではなく、もっぱら料理、気功、霊能力などの実演が行われることもある。

このように番組の構成を、テーマと関係した「ビデオ映像（テロップを含む）」、それとは無関係の「世界比較」「人物ファイル」というビデオ映像、スタジオでの「実演」、番組の冒頭と最後の「オープニング・エンディング」、及び「スタジオ討議」の6つの部分に分け、それぞれの放送時間量（秒）とCMを除いた中での構成比を放送開始から半年ごとに算出した結果を表2に示す。なおスタジオ討議に関しては、その中での外国人出演者の発言部分を取り出して、スタジオ討議の中での構成比を算出している。

まず3年半にわたる放送全体を通じての結果をみると、やはりスタジオ討議の部分が5割を上回って最大の比重を占め、それに次ぐ討議素材となるビデオ映像を併せると、全体の8割を占めていることが判明する。ただし、放送開始から2年ほどの間は、スタ

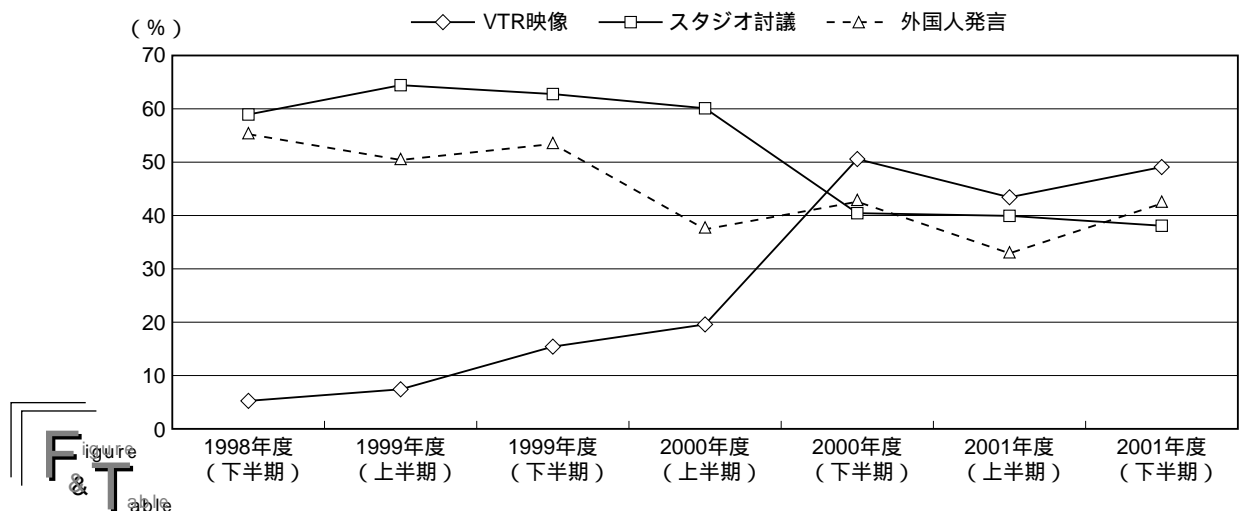


ジオ討議が番組の中心となっており、ビデオ映像の部分は徐々に増加しても2割以下の水準に留まっていたのに対して、2000年度下半期からビデオ映像が急増して、最後の1年半になるとビデオ映像の割合がスタジオ討議を上回るようになっている。またスタジオ討議の中で外国人出演者の発言が占める割合をみても、放送の途中から日本在住の外国人を中心としたトークバトルという当初のコンセプトが変質していることが明らかになる。最初の1年半の間は、外国人出演者の発言がスタジオ討議の半分以上を占めているのに対して、2000年度上半期以降は5割を大きく下回り、外国人出演者よりも、日本人の当事者や関係者、パネリストなどの発言が多くなる傾向が現われている。つまり、放送を重ねるにつれてスタジオ討議の比重が低下しただけでなく、スタジオ討議の中で外国人出演者の果たす役割も同様に減少していることが明確に裏づけられたことになる(図1参照)。

それ以外の部分の中では「オープニング・エンディング」の割合は、5%前後の水準で

	1998年度	1999年度		2000年度		2001年度		全体
	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	
本数	20	19	22	20	22	22	21	146
時間量(秒)	58370	58527	68377	55238	76065	61863	63316	441756
ビデオ映像	5.2% (3048)	7.6% (4446)	15.4% (10560)	19.4% (10707)	50.5% (38418)	43.5% (26911)	49.1% (31146)	28.3% (125236)
世界比較	16.2% (9428)	8.0% (4672)	0.0% (0)	0.5% (279)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	3.3% (14379)
人物ファイル	12.0% (6985)	12.4% (7268)	10.5% (7176)	2.4% (1317)	1.0% (778)	0.0% (0)	0.0% (0)	5.3% (23524)
実演	3.8% (2240)	2.7% (1585)	6.3% (4331)	11.2% (6173)	3.9% (2986)	10.7% (6650)	7.8% (4960)	6.5% (28925)
オープニング・エンディング	4.0% (2328)	5.2% (3062)	5.0% (3431)	6.7% (3691)	4.2% (3174)	6.0% (3730)	4.9% (3086)	5.1% (22502)
スタジオ討議	58.8% (34341)	64.1% (37494)	62.7% (42879)	59.9% (33071)	40.4% (30709)	39.7% (24572)	38.0% (24124)	51.4% (227190)
外国人発言	55.6% (19085)	50.5% (18941)	53.8% (23049)	37.7% (12481)	42.7% (13119)	33.0% (8108)	42.6% (10268)	46.2% (105051)

図1 半期ごとの番組構成(VTR映像, スタジオ討議, 外国人発言の割合)の推移



推移しているのに対して、「世界比較」「人物ファイル」及び「実演」の割合は、放送時期により大きな変動を示している。まず「世界比較」は、最初の1年に集中しており、「人物ファイル」も最初の1年半ほど続いた後、徐々に減少して、最後の1年間は、完全に姿を消していることがわかる。それとは逆に、実演の部分は、放送時期による変動がかなり大きいとしても、2000年度の上半期以降に多く放送されるようになっている。なお最初の1年半の間は、スタジオでの実演は「日本の芸は世界に通用するか」といった特番の中での企画にほぼ限定されており、それを除くと通常の放送の中での実演の割合は、きわめて小さなものとなっていることが判明する。しかし2000年度上半期になると霊能者、催眠術師、超能力者がスタジオに来たり、「お国自慢No1決定戦」「外国人クイズ選手権」といった企画が放送されて実演の割合が急に大きくなり、その後2000年度下半期にいったん鎮静化したものの、2001年度に霊能者のシリーズが形を変えて復活すると共に、「外国人対抗大運動会」「在日外国人に学ぼう！究極の節約術」など討論とは無縁の内容が再び取り上げられるようになっているのである。

#### ▶ 4 外国人発言者の特性

この番組の核となるスタジオ討議の場面には、通常、100名の外国人が参加している。その顔ぶれは、途中で何度か入れ替わっているが、いずれも日本に長く滞在して日本語の上手な人たちばかりである。この番組への出演を契機にタレント活動を開始した人たちもいるが<sup>8)</sup>、基本的には学生以外に、会社員、経営者、教師などの職業に就いている者が多く、いわゆる素人参加形式の色彩が強い番組となっている。ここでは外国人出演者が「どのような発言をしたか」ではなく、「誰が多く発言したか」という点に着目して、文化的背景を中心に発言者の特性を分析してみたい。当然のことながら、番組収録の際に多数の外国人がスタジオに集結したとしても、実際に発言するのはごく一部に限られてくる。146回の放送を通じて、一度でも発言をした外国人出演者は307名、発言者の総数は延べ2501名に達している。ただし、307名のうち1番組のみの発言者が31%（94名）と最も多く、それに次いで2番組での発言者が13%（39名）を占めており、4分の1（37回）以上の放送で発言を記録したのはわずか12名、半分（73回）以上となるとゾマホン・ルフィン（ベナン）とケビン・クローン（アメリカ）の2名に限られてくる。

分析対象となった146回の放送を通じて一度でも発言した人数と延べの発言者数（総数）を国・地域別、男女別に集計した結果を表3、そこでの地域のうち「西欧・北欧」と「東欧」をまとめて「ヨーロッパ」、中東」と「旧ソ連」を一括して発言者総数の地域別構成比を算出し、男女別の構成比と併せて、3年半にわたる放送期間における半年ごとの推移を整理した結果を表4、発言した番組数の多い順に外国人出演者25名を並べた結果を表5に示す。

まず発言者総数と発言した人数を国別にみると（表3参照）、いずれに関してもアメリカが最も多く、それに次いで中国、韓国の順になっていることが確かめられる。ただし、

脚注

8. 他のテレビ番組に出演したり、講演を行う場合もあるようだが、外国人出演者の手による以下のような出版物が刊行されている。ゾマホン・ルフィン「ゾマホンのほん」（1999）河出書房新社、「ゾマホン、大いに泣く」（2000）河出書房新社；サンドラ・ヘフェリン「浪費が止まるドイツ節約生活の楽しみ」（2000）光文社、「甘えを捨てる ドイツ女性自立生活の楽しみ」（2001）光文社、「生きる力をつけるドイツ流子育てのすすめ」（2002）PHP研究所；ノイマン・クリストフ「イケてない日本

日本人のホントのところ」（2001）インターメディア出版；ケビン・クローン「ケビン・クローン空爆式ディベート革命 日本人が死んでもアメリカ人に追いつけない理由」（2002）ベストセラーズ；クレメント・アダムソン「バツイチ、コブつき、波瀾万丈」（2002）平凡社。またピートたけしと11名の外国人出演者の意見を集めた「目覚める日本人!!! ここがヘンだよ日本人」（2002）が河出書房新社より出版されている。

表3 発言者の国・地域別、男女別構成

	総数	人数	男	女		総数	人数	男	女
<b>西欧・北欧</b>	254	31	14	17	<b>東アジア</b>	412	55	29	26
イギリス	26	6	0	6	モンゴル	1	1	0	1
イタリア	10	5	3	2	韓国	184	24	15	9
ドイツ	141	6	3	3	中国	227	30	14	16
フランス	33	4	1	3	<b>北米</b>	369	36	29	7
デンマーク	12	1	1	0	アメリカ	353	31	25	6
オランダ	2	2	2	0	カナダ	16	5	4	1
ギリシャ	1	1	1	0	<b>中南米</b>	190	25	13	12
スイス	1	1	1	0	キューバ	21	2	2	0
スウェーデン	4	1	1	0	コロンビア	33	4	1	3
スペイン	23	3	1	2	メキシコ	22	3	0	3
ベルギー	1	1	0	1	ベネズエラ	8	1	0	1
<b>東欧</b>	39	8	3	5	アルゼンチン	5	3	2	1
ハンガリー	20	3	2	1	ペルー	7	3	2	1
ブルガリア	3	1	0	1	ブラジル	92	8	6	2
ポーランド	1	1	0	1	チリ	2	1	0	1
ルーマニア	15	3	1	2	<b>オセアニア</b>	65	14	10	4
<b>旧ソ連</b>	74	18	10	8	ニュージーランド	6	3	2	1
ロシア	43	15	8	7	オーストラリア	59	11	8	3
エストニア	2	1	0	1	<b>アフリカ</b>	490	39	33	6
ウズベキスタン	12	1	1	0	ガーナ	141	7	6	1
アゼルバイジャン	17	1	1	0	エジプト	16	4	3	1
<b>中東</b>	143	23	18	5	ガンビア	1	1	1	0
アフガニスタン	3	1	1	0	エリトリア	14	1	0	1
トルコ	2	1	1	0	ギニア	1	1	1	0
イラク	20	4	3	1	ケニア	8	4	3	1
イラン	112	15	11	4	コンゴ	71	5	5	0
レバノン	3	1	1	0	ジンバブエ	4	1	1	0
イスラエル	3	1	1	0	ウガンダ	12	2	2	0
<b>南・東南アジア</b>	465	58	40	18	セネガル	36	2	2	0
インド	92	4	4	0	チュニジア	4	1	1	0
パキスタン	76	9	9	0	ベナン	87	1	1	0
バングラデシュ	76	8	8	0	ナイジェリア	33	2	2	0
スリランカ	76	6	4	2	マリ	28	2	2	0
インドネシア	16	2	1	1	モロッコ	22	2	1	1
マレーシア	34	7	5	2	マラウイ	1	1	1	0
ネパール	11	4	4	0	トーゴ	5	1	0	1
ミャンマー	22	4	1	3	南アフリカ	6	1	1	0
タイ	16	4	0	4	<b>合計</b>	2501	307	199	108
ベトナム	1	1	1	0					
カンボジア	6	3	2	1					
フィリピン	39	6	1	5					

表4 発言者総数の地域別・男女別構成比及び半期ごとの推移(%)

	1998年度	1999年度		2000年度		2001年度		全体
	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	
地域別								
アフリカ	19.6	25.9	23.8	23.2	13.7	13.1	12.2	16.4
南・東南アジア	18.6	18.8	17.9	18.4	17.3	17.7	20.2	21.5
東アジア	16.5	9.3	14.9	16.8	20.5	21.7	18.1	18.7
北米	14.8	13.1	17.2	17.0	12.1	12.8	15.1	15.1
ヨーロッパ	11.7	6.3	11.9	11.4	15.3	15.7	14.3	9.6
中東・旧ソ連	8.7	13.5	5.6	3.7	10.1	10.0	9.2	10.5
中南米	7.6	9.3	7.0	7.9	6.2	7.4	8.8	5.5
オセアニア	2.6	3.8	1.6	1.7	4.9	1.7	2.1	2.7
男女別								
男性	73.0	68.6	74.1	73.3	73.9	74.1	72.7	77.2
女性	27.0	31.4	25.9	26.7	26.1	25.9	27.3	22.8

	名前	出身国	職業	年齢	性別	回数
1	ゾマホン・ルフイン	ベナン	学生	34	男	87
2	ケビン・クローン	アメリカ	フリージャーナリスト	37	男	76
3	ジャスティン・パターソン	アメリカ	山梨学院大助手	23	男	59
4	ノイマン・クリストフ	ドイツ	学生, 研究者	31	男	57
5	サニー・フランシス	インド	FMラジオDJ	34	男	54
6	ウチダ・ヨウコ	ガーナ	学生	24	女	52
7	クレメント・アダムソン	ガーナ	レストランマネージャー	35	男	46
8	デビッド・ニール	アメリカ	英会話教師	29	男	42
9	ムポイ・ムポイ・カント	コンゴ	学生	33	男	38
9	ニコラ・ロレッタ・ナカシマ	スリランカ	学生	16	女	38
11	柳権俊(リュウ・ヒジュン)	韓国	貿易会社経営	21	男	37
11	ゲッツ・ヘーヤマン	ドイツ	自営業	38	男	37
13	サミュエル・ポップ・エニング	ガーナ	会社員	28	男	36
14	マンスール・ジャーニュ	セネガル	英会話教師	34	男	35
14	アレキサンドラ・ヘフェリン	ドイツ	ドイツ語教師	23	女	35
16	陳果祇(チン・カチ)	中国	会社員	27	男	32
17	アールビンダー・シン	インド	会社員	35	男	31
18	楊建雄(ヤン・ケンユウ)	中国	レストラン経営	31	男	30
18	ユーユー・イドゥボ	ナイジェリア	洋服屋	28	男	30
20	エドワード・サウスウィック	アメリカ	作家 英会話学校経営	44	男	29
20	カーフィザデー・アラシ	イラン	セールスエンジニア	27	男	29
20	モハメド・リボン	バングラデシュ	会社員	36	男	29
20	ジルベルト・アバレシード・ペレイラ	ブラジル	会社員	35	男	29
24	叶森(イエ・セン)	中国	学生	25	男	27
24	ママドゥ・ドゥンピア	マリ	ミュージシャン	32	男	27

\*職業, 年齢は初出時のもの



米中韓に続く国は、一度でも発言した人数で見るとロシアとイラン、発言者総数で見るとドイツとガーナという具合に指標の取り方によって様相を異にしている。ロシアとイランの場合には、それぞれ15名が発言をしているが、イランのカーフィザデー・アラシ以外に多くの放送で発言を記録した者は見当たらない。それに対して一度でも発言した人数は、ドイツ6名、ガーナ7名と少ないが、ドイツの場合にはノイマン・クリストフ、ゲッツ・ヘーヤマン、アレキサンドラ・ヘフェリン、ガーナに関してはウチダ・ヨウコ、クレメント・アダムソン、サミュエル・ポップ・エニングとそれぞれ3名が発言回数の上位に名を連ねており（表5参照）、その結果として延べの発言者数が多くなっているわけである。なお、この点に関しては、アフリカのベナンが際立った特徴を示している。この国の出身者で発言したのはゾマホン・ルフインの一人だけだが、この人物は87回と最も多くの放送で発言しているのである。

次に、発言者総数を地域別にみると、アフリカが490名と最も多く、次いで南・東南アジア（465名）、東アジア（412名）、北米（369名）の順になっているのに対して、発言した人数で見ると南・東南アジアが58名と最も多く、それに次いで東アジア（55名）、アフリカ（39名）、北米（36名）という具合に異なった順位になっていることがわかる。アフリカに関しては、18ヶ国の人たちが発言しているが、その中には上記のガーナ3名、ベナン1名以外にも、コンゴのムポイ・ムポイ・カント、セネガルのマンスール・ジャーニュ、ナイジェリアのユーユー・イドゥボ、マリのママドゥ・ドゥンピアと計8名が発言回数の上位25名に含まれており、この番組の中ではアフリカ勢が顕現性の高い存在となっていることが裏づけられる。一方、南・東南アジアの12カ国の中では、インド出身

者の発言総数が最も多く、スリランカ、バングラデシュ、パキスタンの3カ国がそれに次いでいる。ただインドのサニー・フランシス、アールビンダー・シンの2名の他、スリランカのニコラ・ロレッタ・ナカシマ、バングラデシュのモハメド・リボンの計4名が発言回数の多い25名に入っている程度であり、インドの2名以外には、それほど際立った個性を発揮しているような人物は見当たらない。

ここでもう一度、発言回数上位25名のリストをみると、ゾマホン・ルフインの次に、ケビン・クローンとジャスティン・パターソンという2名のアメリカ人が続いていることがわかる。ゾマホンは、1998年10月の放送開始時から全期間を通じて番組に出演しているのに対して、ケビンとジャスティンは1999年3月に最初の発言を記録しており、ゾマホンよりも半年ほど出演期間が短くなっている。特に最後の1年はケビンが外国人出演者の中で最も高い発言率を記録しているのだが、全体を通じてみると、母国のペナンに学校を建設する過程が何度も「スタジオ外国人の夢ファイル」というシリーズで取り上げられたこともあり、ゾマホンが最も大きな存在感を示していたように思われる。私たちが首都圏の大学生を対象に行った質問紙調査（大坪・相良・萩原，2003参照）で印象に残った外国人出演者を自由に挙げさせたところ、番組視聴経験者1765名の57%にあたる998名がゾマホンの名前を挙げたのである。それに次いでケビンの名前を記入する者が多く（424名）、この2人が飛び抜けて強い印象を残したことが確かめられる。しかし3番目に発言の多かったジャスティン・パターソンの名前を挙げた者はわずか2名にすぎず、視聴者の印象は、発言頻度ではなく、発言内容や個性の強さに強く影響されることが示唆されている。同じアメリカ人でも、ケビンは、自国中心主義的な発言と好戦的態度で強烈な個性を発揮しているのに対して、ジャスティンは、むしろ常識的な発言をすることが多いのである。

さて東アジアの場合は中国と韓国、北米の場合はアメリカに発言者がほぼ限定されており、その人たちの発言は、地域ではなく、それぞれの国を代表するものとして解釈されやすい。また討議素材として日本以外が取り上げられる場合、アメリカ、中国、韓国は単独で扱われることが多いのに対して、アフリカの場合は、個々の国や国民ではなく、アフリカ、アフリカ人として一括して扱われている。日本人だけでなく、アフリカをはじめとする外国人出演者の間でも、アフリカ内の国情の違いはあまり考慮されず、ひとつの文化単位として認識されることが多くなっているようである。一方、ヨーロッパの場合は、ドイツ出身者の発言が際立っているが、この人たちはヨーロッパという地域ではなく、自分の出身国の立場で発言することが多いのに対して、日本人やアジア、アフリカの人たちの間では、ヨーロッパをひとつの文化圏として捉える傾向が強くなっている。なお、ここではアジアを「東アジア」と「南・東南アジア」に分けて集計しているが、実際にはアジア、アジア人という形での言及の方が一般的であり、こうしてアジアを一括すると番組内で最大の比重を占めることになる。いずれにしろ発言者の国・地域別の構成や国・地域への言及内容を考慮すると、この番組ではアメリカ、中国、韓国の3カ国とアフリカが最も多く取り上げられており、それ以外の国・地域に焦点が合わされることは一段と少なくなっているのである。

次に、発言者の性別に着目すると、3年半の放送を通じて199名の男性と108名の女性が発言しており、その構成比は男性65%、女性35%と男性優位になっていることが判明する（表3参照）。これを地域別にみるとアフリカ、北米など大多数で男性優位の傾向が顕著になっているのに対して、東アジアと中南米では男女比が拮抗、逆にヨーロッパでは多少とも女性優位になる傾向が出現している。また、発言した人数ではなく、延べの総数でみると男性73%、女性27%と男女間の隔差がさらに広がり、その構成比は放送の全期間を通じてかなり安定した傾向を示している（表4参照）。さらに発言回数上位25名

のリストをみると、そこに含まれている女性はウチダ・ヨウコ（ガーナ）、ニコラ・ロレッタ・ナカシマ（スリランカ）、アレキサンドラ・ヘフェリン（ドイツ）の3名のみであり、スタジオ討議が男性主導で行われている様子が再確認される結果となっている。

さて3年半にわたる放送期間を通じて、番組内でのスタジオ討議の比重が徐々に低下していったことを先に指摘したが、その傾向は半年ごとの発言者数の推移にも明確に反映されている（図2参照）。放送開始から1年半の間は、半期の発言者総数は400人を超えていたのに対して、2000年度には300人台、2001年度には200人台と外国人出演者の発言が大幅に低下する様子が明らかにされているのである。また、発言者の地域別構成比をみると（表4参照）、安定した男女別の構成比とは対照的に、放送時期によってかなり大きな変動を示していることがわかる。最初の1年半はアフリカ出身者の発言が最も高い割合を占めていたのに対して、2000年度に入ると、アフリカ勢の比重が急速に低下して、その後は東アジア、南・東南アジアとアジア勢の発言率が最も大きくなっている。発言者総数の地域別構成比ではなく、アフリカ、東アジア、南・東南アジアの3地域の発言者総数の推移を半期ごとにプロットした図3の結果をみると、いずれの地域も放送の後半にかけて発言者数が減少する傾向を示しているものの、アフリカの場合には、その落ち込みの幅が特に大きく、最初の1年半の間は100名を超えていた発言者総

図2 半期ごとの発言者総数の推移（全体）

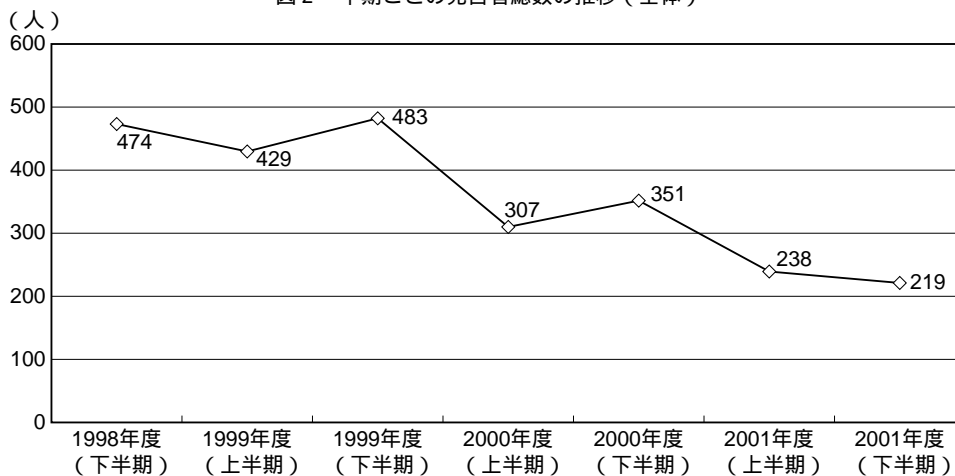
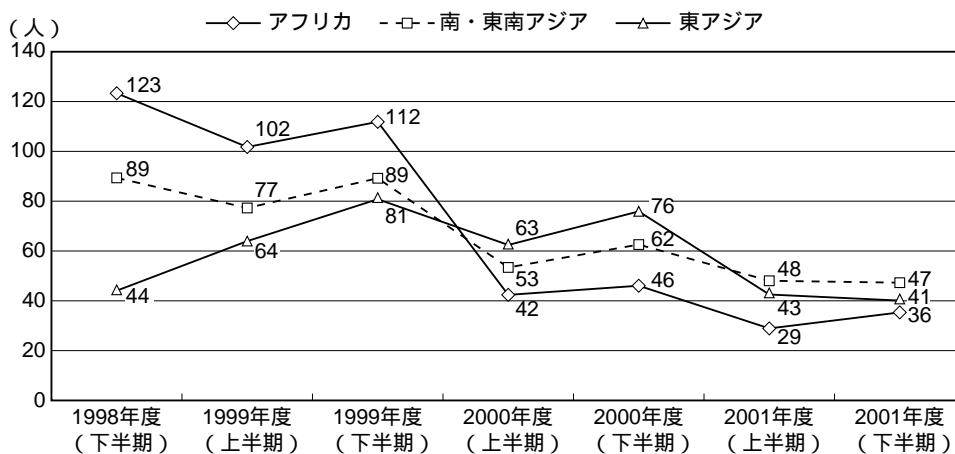


図3 半期ごとの発言者総数の推移（主要地域別）



数が、2000年度に入って半分以下に急落していることが確かめられる。

## ▶ 5 「人物ファイル」と「世界比較」

以上は、主としてスタジオ討議に関する分析ということになるが、番組テーマとは独立に挿入された「人物ファイル」と「世界比較」というシリーズの内容を最後に検討しておくことにしよう。1998年10月の放送開始からしばらくの間は、フィールド実験風に状況設定していくつかの国の人たちの反応を比較する「世界人間ウォッチング」というコーナーが番組途中に入り、最後は日本に滞在する外国人の生活を紹介する「在日外国人ファイル」というコーナーで締めくくるとというのが、むしろ定型となっていた観がある。その後、前者に関しては「世界人間ウォッチング」の代わりに、いくつかの国を取り上げて国情の違いを具体的に紹介する「世界比べてみよう」という形式をとったり、後者に関しては、一般の在日外国人だけでなく、有名人や外国人出演者を取り上げるなど、内容を少しずつ変えながらも継続していたのだが、いずれも放送の後半には完全に姿を消している。

在日外国人ファイルには、通し番号が振られており、当初は千葉で車の部品販売をしているマレーシア人男性、群馬のクラブで子どもにサッカーを教えているブラジル人男性、川口のバイク屋で働くハイチ人男性、原宿でヒップホップショップを営んでいたガーナ人男性、歌舞伎町でダンサーとして働くフィリピン人のニューハーフなど一般人を取り上げていたのだが、途中からサッカーのアデミール・サントス、バレーボールのヨーコ・ゼッターランドなどの有名人も扱うようになり、その最終回（#21、2000年5月17日）では、横田の米軍基地に勤務するプロボクサーのリック吉村が紹介されている。また、これと平行して、1999年からは「外国人出演者ファイル」と称してゾマホン・ルフィン、クレメント・アダムソン、ママドゥ・ダウンビアなどアフリカ人出演者も取り上げられるようになり、特にゾマホンは、その後「スタジオ外国人の夢ファイル」というシリーズで母国のベナンに小学校を建設する過程が6度にわたって詳しく紹介されている。この他に外国人出演者としてパキスタンのアリ・アーメッドやアメリカのエドワード・サウスウィックも取り上げられており、必ずしもアフリカ一辺倒というわけではないが、南アフリカのアーン・ムーアクラフト、コンゴのサンバ・セベリンの帰国時の同行取材やガーナ人と結婚した日本人女性の現地での生活が「海外在住日本人ファイル」として紹介されたこともあり、全体としてはアフリカ勢がこのコーナーの主役となっていた観がある。なお、スタジオ討議では、日本を含めた多くの国や国民に対して批判的な言辭が多く飛び交っていたのに対して、こうした形で特定の個人を取り上げる場合には、むしろ好意的な描写が多くなっていることに留意する必要がある（渋谷・萩原、2002）。

「世界人間ウォッチング」の方は、テスト放送（1998年4月8日）の時にも「コンタクトレンズを落した時に一緒に探してくれるか」というテーマで日本の他に、イタリア、インドネシア、ブラジル、ケニアでフィールド実験を行っており、当初は番組の目玉として位置づけられていたが<sup>9)</sup>、全部で9回ほど放送しただけで1年以内に終了している。そのうち家族の反応を比較した5つの事例について各国の反応を要約した結果を表6に

### 脚注

9. 2002年3月に番組が終了した後も、同じコンセプトの番組が何度か「スーパーフライデー」という特別枠で放送されており、「ここがヘンだよ世界の大家族」（2002年7月5日）という回では「娘が彼氏と同棲したいと言い出した時」「もし自宅で悪霊払いが行われていたら」「自分の息子がゲイだと告白した時」

といった状況を設定して、タイ、アメリカ、イタリア、ケニアの4カ国の父親の反応を比較している。従って、放送開始前にも放送終了後にも「世界人間ウォッチング」と同じ形式のコーナーが番組に取り入れられていたことになる。

示す。そのいずれにもケニアが含まれており、娘や妻に対する反応からケニアの家庭では父親の権威が強く、男尊女卑の考えが支配的となっている様子が浮き彫りにされている。いずれにしる世界の国々を比較する場合には、必然的に共通点よりも相違点に目を向けることが多くなり、また「情熱的なブラジル人」「開放的なブラジル」「愛の国フランス」「個人主義の国フランス」などステレオタイプの表現が頻繁に使われていることが明らかになる。

一方、「世界比べてみよう」の場合は、実験的に状況設定することなく、さまざまなことさらに関する国情の違いを紹介しているのだが、ここでも各国の特色を際立たせるた

表6 「世界人間ウォッチング」の事例（家族内での問題を扱った事例のみ）	
もしも平均月収の約3倍にあたる100万円を妻が拾ったら（夫の反応） 1998年10月21日放送	
ケニア	妻が拾ってきた財布に関心をもつ。まず車のローンにあて、残りを家族と分け合うことに。
ロシア	警察に届けることを却下、もらうことにする。幸せの絶頂に。
イタリア	親戚を含めた9人での夕食の席で、警察に届けることを却下、「貰う」と宣言して皆で山分けに。
タイ	迷わずに拾った財布をすぐ警察に届けることに。「タイでは子どもでも警察に届ける」とコメント。
もしも娘から友達の家泊まるという電話がかかってきたら（父親の反応） 1998年11月4日放送	
イタリア	娘が帰宅していないことを心配し、娘の電話に対して、すぐに帰ってくるように言う。娘を信じず、友達の家で電話をして、確認後、再度説得。「イタリアは、誘拐事件が多い」という資料提示。
ケニア	母娘とも父親は怖いと述懐、娘の電話に対して頭ごなしに叱る。「学費も食費も自分が出している」と言い、母親を責める。電話番号を確認して、再度、電話して娘を叱る、友達の父親にも説教、すぐに迎えに行くという。
アメリカ	娘が帰宅していないことを気にかけない。娘の電話に対して、すぐにOKを出す。「あすは日曜で、宿題も無いし、いいんじゃない、夫婦二人の時間も必要だし」とコメント。
もしも奥さんの作った料理がまずかったら（夫の反応） 1998年11月18日放送	
ブラジル	まずい牛肉の煮込みを夫は無理して食べる。「情熱的なブラジル人、決して妻を悲しませることはない」というナレーション。
フランス	まずいポトフ、食べないのは愛していないからと泣く妻をなだめる夫。「さすが愛の国フランス」というナレーション。
ケニア	まずい料理に怒りだし、ネタをばらしても夫の機嫌は直らない。「料理のうまさで妻を選んだのに」という夫の発言を聞いて無然とする妻。
もしも娘が父親の前で彼氏とイチャイチャしたら？（父親の反応） 1998年12月2日放送	
フランス	父親は落ち着かない様子、何も言わず、テレビを見る。ネタばらしに「たとえ娘でも個人の問題だから恋愛に口出しはできんよ」と父。「さすが個人主義の国フランス、娘の恋愛にも口出ししないのが基本のようだ。でも本当は、言いたかったんでしょ、お父さん」とナレーション。
ブラジル	娘が彼氏とキスをすると怒り出す父親、しかし自分のファーストキスは12歳。「全く筋が通っていないお父さん、でも開放的なブラジルとはいえ、親の前でイチャツクのは許されないようだ」とナレーション。
フィリピン	手をとりあってイチャツク出すと、びっくりして用事を言いつけるが、文句は言わず。二人で部屋に行こうとすると、自分も行こうとする。「自分の気持ちをなかなか言い出せないフィリピンのやさしいお父さんでした」とナレーション。
ケニア	彼氏が挨拶すると、怒る気配なし。しかし娘の肩をだき、結婚までは考えていないと彼氏が言うと、突然、怒り出す。娘に対して「こんな男にひっかかって、学費と食費を払っているのは誰だ」と怒鳴る。「やっぱりケニアのお父さんは恐かった」とナレーション。
もしも家族で日本に行くことになったら？（父親が日本に転勤になったと切り出した時の家族の反応） 1999年2月10日放送	
ブラジル	サンパウロの日系3世、長女（12歳）が反対、日本では食べ物に毒を入れる事件が毎日起きているから、と説明。次女（8歳）は、ディズニーランドに行きたいというが、日本の学校には行きたくない。「誰も一緒に日本に行ってくれないんだな」という父に「お金と玩具を送ってね」とおねだりをする次女。
ケニア	ナイロビの商社勤務の父が、日本への転勤を切り出しても、家族は無反応。日本のことを知らないで、日本料理店で食事をしようとするが、梅干、寿司に難色を示す。すき焼きに生卵がついてきて、一斉に怒り始める。
フィリピン	マニラで観光ガイドをしている父が日本転勤を切り出すと、家族は全員大喜び、ガイドブックで日本の勉強、友人や親戚に電話をかけまくる母、電話を受けて人々が次々に駆けつける。



めにステレオタイプの描写が多く用いられている。このコーナーで紹介された各国の事情を整理した表7をみると、ロシアに関しては「ロシアの車は壊れやすい」「品不足に悩むロシア」「偽札大国」「経済危機のロシア」などもっぱら経済的な窮乏に焦点が合わされており、アメリカに関しても「犯罪大国」「離婚大国」といった否定的表現が多く用いられていることがわかる。一方、イタリアに関しては、運転免許は「1回の路上試験ですぐに合格」「髪型は個性的」といった自由奔放なイメージと共に「学校給食のメニューは意外とシンプル」「子ども部屋にゲームなどなし」という具合に質素で素朴な生活も強調されている。またアジアの中で、マレーシアに関してはモスリムの戒律の厳しさが強調される一方で、タイに関しては「運転免許は生涯使用可能」「タイのコンビニは日本とつりふたつ」「タイの子どもたちの給食は、世界一贅沢」など好意的な表現が目立っている。なお、ここでもケニアが最も多く取り上げられているのだが、家庭内での父親の権威や男尊女卑の考えがクローズアップされた「世界人間ウォッチング」の場合とは異なり、「コンビニは夕方5時に閉店」「バリカンだけで散髪」「小学生は小遣いなし」「海外旅行をする人は、年間5千人程度」といった形で、むしろ経済面における途上国としての位置づけが強調されている。

## ▶ 6 結 び

本稿では、主として形式的側面から番組の特質を探り、日本に在住する外国人による対日批判に基づく討論という当初の番組コンセプトが徐々に変質していく様子を明らかにした。放送を重ねるにつれてスタジオ討議の割合が減少し、その中での外国人発言の割合も同時に減少していることが示されたわけだが、それでも多数の外国人が一同に会して、それぞれの意見を日本語で披瀝し、感情を吐露するという点が番組の売物となっていたことには変わりがない。番組全体を通じて「外国」「外国人」という一般的カテゴリーへの言及がなされていたとしても、その際に特定の国・地域が念頭に置かれるのは珍しいことではないし、実際に特定の国・地域あるいは特定の人種や国籍の人々をターゲットにした議論がしばしば展開されている。

3年半の放送期間に延べ70カ国の人々の発言が記録されているが、「どの国・地域への言及が多いか」「どの国・地域の人々が多く発言したか」のいずれを指標としても、この番組の中ではアメリカ、中国、韓国の3カ国とアフリカがきわめて大きな比重を占めていることが確かめられる。中国、韓国以外にもインド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカのアジア勢、またドイツの人たちも積極的に発言しているのだが、その発言がアジアやヨーロッパを代表するものとして扱われることが少ないのに対して、アフリカの場合には、特定の国ではなく、ひとつの文化圏として認識されることが多くなっているのである。実際に、米中韓の3国及びアフリカについては、それぞれをタイトルに冠した次のような番組が放送されている。

まずアメリカの場合は、「ここがヘンだよUSA（1999年3月24日）」で他国に干渉する警察国家、「ここがヘンだよアメリカ人（1999年5月12日）」では銃社会という側面が批判の対象とされ、また国際紛争をテーマとした放送でも（「コソボ紛争を考える」「戦争について考える」「戦争の残した物」）アメリカ批判を軸とした議論が展開されている。また「ここがヘンだよ中国人（1999年9月29日）」では、中国人の自己中心性、密入国や契約精神の欠如が槍玉に挙げられており、「日本と韓国の関係を考える（2000年3月8日）」では、日本の植民地支配に関する両国の歴史認識のずれ、教科書問題が主たる討議素材とされている。一方、「ここがヘンだよアフリカ人（2000年3月29日）」は、2時間の特

表7 「世界比べてみよう」の主な事例	
車の免許を取るには...日本での費用は、平均35万円、有効期間は3年 1998年11月11日放送	
アメリカ	教習所はない、費用は約1400円。
ロシア	教習所がある。学科の時間が長い(176時間)ロシアの車は壊れやすく、故障の時に自分で修理するから、と説明。費用は、約1万5千円。
イタリア	1回の路上試験で、すぐに合格。「イタリアで車に乗る方は要注意!!」のテロップ。
タイ	日本とは違い、免許は生涯使用可能。
コンビニエンスストア 1998年11月11日放送	
アメリカ	犯罪大国アメリカの資料提示。アメリカのコンビニには、さまざまな防犯設備がある。
タイ	日本と同じようなコンビニが存在。「タイのコンビニは日本とうりふたつ」のテロップ。
ロシア	品不足に悩むロシアにコンビニはない。24時間営業の店を見つけるも、金持ち専用。レジで店員が偽札をチェック、「偽札大国ロシア、皆さん、ロシアに行ったらお札を確かめてね」とテロップ。
ケニア	夜は危険のために、夕方5時にほとんどが閉店。夜ジュースが飲みたくなったらどうするということで、ホテル、ディスコに行くも入手できず、「ケニアで夜のどが乾いたら水を飲もう」のテロップ。
「学校給食」 1998年11月18日放送	
ロシア	モスクワの小学校には朝の給食があり、食べない子にはキャッシュバック。昼食メニューは、チキンスープと鶏肉で質素、「経済危機のロシアでは、栄養不足でも、これで精一杯」のテロップ。
イタリア	イタリアといえば食の都、贅沢な給食を想像するが、実際のメニューは意外とシンプル。費用は1万6千円、高いが、国の補助がないので、これでもぎりぎり。
タイ	オープンカフェ、人気メニューの紹介、デザート完備で無料。高校では屋台が並ぶ。「タイの子どもたちの給食は、世界一贅沢」のテロップ。
「理髪店」 1998年11月18日放送	
アメリカ	ロサンジェルス、カタログから髪型を選択、人気No1は、ピキニ・パーパーショップ。
ケニア	ナイロビ、バリカンだけで散髪、一番人気はバルド(ハゲ)という髪型。
イタリア	髪型は個性的だが、頭を洗うとシャツが濡れる荒っぽさ、その中で丁寧なお店ということで、女装した妖しい店長を紹介。
サラリーマンの一日：日本の場合、平均8時間40分の労働時間 1999年2月24日放送	
アメリカ	ニューヨークでビデオ制作会社勤務の30歳、自宅から会社まで地下鉄で35分、残業をしないために昼休み返上で仕事、午後6時に退社して真っ直ぐ帰宅。実働時間8時間30分。
イタリア	ローマでコンピュータ会社勤務の31歳、回数券を使い、地下鉄、バスで出社、通勤時間35分。昼食は外食だったが、社員食堂や自宅でする場合もある。午後6時に残業せずに帰宅、実働7時間。
マレーシア	クアラランブルで建設会社勤務の32歳、朝5時起床、モスリムの一日はお祈りで始まる。奥さんとオートバイで出勤、排気ガスがつかないように上着を逆さに着る。昼食は屋台、ランチ後はモスクへ。夕方5時半、夜の祈りに間に合うように帰宅。実働7時間。
ケニア	ナイロビで建築会社勤務の27歳、自宅は都心から20キロ、朝食を済ませ5時半に出勤、電車を利用するが、たいへんのろく、会社まで3時間かかる。ランチは外食、公園で昼寝をして3時から5時まで働く。実働5時間。
小学校高学年のお小遣い：日本の小6月5000円、用途はゲームソフト、マンガ、お菓子の順 1999年3月17日放送	
イタリア	小学5年生で月600円、子供部屋にゲームなどなし、お金持ちになるために放課後にサッカーの練習、売店で120円のジュースを買う。
マレーシア	小学校低学年で月900円、用途はかき氷、ガシン(コマ回し)が流行、女子はバトゥ・セレバン(お手玉)で遊ぶ。高学年女子で1000円、手伝いをしてお金を貰い、お菓子を買う。
ケニア	小学生は小遣いなし。欲しいものはない、遊ぶ暇もなく、家では勉強と手伝い。
世界各国離婚事情：日本の離婚は、昨年、22万2千組、2分22秒に1組 1999年4月14日放送	
アメリカ	離婚大国、昨年、116万組、27秒に1人が離婚、離婚理由は日米とも性格の不一致、夫の暴力、不倫の順。
ケニア	婚姻届を出す習慣がなく、離婚裁判はあまりない。
イタリア	カトリック教国のため、30年前まで離婚は法律で認められておらず、離婚は難しい。
マレーシア	モスリム民法があり、未婚のカップルに厳しい。一夫多妻制で夫が妻に通告すれば離婚成立。妻からは、宗教裁判に申し立てる必要があり、難しい。
世界の日本ツアー 1999年4月28日放送	
イタリア	人気があるのはフランス、スペイン、ギリシャ。日本旅行は高い(2週間で100万円)ので人気がない。
アメリカ	アメリカ人はイギリス、フランス、メキシコに行く。日本は12位、人気は東京、箱根、京都を5泊7日で回る23万円のコース。
ケニア	海外旅行をする人は、年間5千人程度。日本へのツアーはなし、航空運賃は往復35万円、ケニア人にとっては900万円に相当、ビザ取得には、日本からの招待状と身元保証が必要。
台湾	日本へのツアーの人気が最も高い。年間、約80万人が来日、中でも雪と温泉がある北海道が人気。北海道ツアーに参加した張さん一家12名の同行取材。

番でかなり娯楽色の強い内容となっている。そこでは「アフリカにはゲイはいない」というアフリカ人の主張に反する取材結果をビデオで提示した後、日本人のゲイをスタジオに招いて対決場面を演出し、その後は「アフリカ人に対する素朴な疑問」というコーナーを設けて「何の肉でも食べる」「リズム感がいい」「視力がいい」といったアフリカ人に対するステレオタイプの真偽をスタジオで検証、さらにコンゴ出身者の迷信的発言の現地での裏づけ調査や日本人のガン黒ギャルをマサイ族の部落で生活させるといった企画物のビデオを流す一方で、「アメリカ人と偽ってナンパする」「他人の迷惑を考えずどこでも騒ぐ」といった日本在住のアフリカ人の問題点、さらにはアフリカの内戦の多さや難民の飢えと恐怖を取り上げて議論するといった複雑な構成になっているのである。

スタジオ討議以外の「人物ファイル」や「世界比較」などを含めて、アフリカの顕現性の高さが番組のひとつの特徴となっているわけだが、米中韓の3国に比べると、アフリカに関する日本人の知識や関心は格段に乏しい。番組終了後に実施した調査（大坪・相良・萩原，2003）でアジア，ヨーロッパ，アフリカの各地域から思い浮かぶ国名を5つまで自由に挙げさせたところ，アフリカに関する正答率が飛び抜けて低くなることが確かめられているし<sup>(10)</sup>，実際に番組の中でアフリカ出身の出演者が日本のテレビにおけるアフリカの扱いや偏ったイメージについて口々に不満の声を挙げている。

「テレビ局は、外国の状況を日本の国民にみせてください。……私は日本に来て4年半，2回しかアフリカのことみたことない。（ゾマホン・ルフィン，ベナン）」

「日本のテレビをみるとアフリカは、ほとんどライオンしか映っていない。（ユーユー・イドゥボ，ナイジェリア）」

「私が日本人に怒っているのは、私は誰かに会うと“あなたどこの国から来たの？”と聞かれると“想像してみて？”と聞くんですよ。で「ジャマイカ人とかアメリカ人」と言われます。“違いますよ、アフリカ人ですよ”と言うと“あっそう、あのヤリ持って、こうやって飛んでるんですか？”と言われます。（ローズ・ワンボイ，ケニア）」

「日本でアフリカというとひとつの国で、皆ヤリ持って裸だと思っている。……アフリカのこと知らなさすぎる。（マンスール・ジャーニュ，セネガル）」

「NHKからテレビ東京までアフリカの番組は、裸の部族の紹介ばかり。いいところもみせるよ！アフリカは貧しいばかりじゃない！（サミュエル・ポップ・エニング，ガーナ）」

番組ジャンルを問わず、日本のテレビが取り上げる外国関連情報は、アメリカに関するものが圧倒的に多い（萩原・御堂岡・中村，1987）。最近では、中国や韓国についてもテレビを通じて多くの情報が伝えられるようになってきているが（川竹・杉山，1996；川竹・杉山・原・櫻井，2000），それに比べるとアフリカに関する情報は絶対量が乏しく，その内容も自然や動物，未開の部族，難民や飢餓といった側面に大きく偏っていることは否定できないであろう。また他の国・地域に比べると，アフリカに行ったり，アフリカ人と会うなど直接的な接触経験をもつ日本人の数も，きわめて限られたものとなっている<sup>(11)</sup>。それだけにこの番組の視聴経験は，アフリカやアフリカ人に関する認識やイメージに大きな

**脚注**

10. 各地域の国名の正答数を平均値でみると，アジア4.70，ヨーロッパ4.69に対して，アフリカは3.52となっており，またアフリカに関しては番組視聴経験の多い者ほど正答数が増える明確な傾向が出現している。なお，アフリカの国名としては南アフリカが最も多く挙げられており，それに次いでエジプト，ナイジェリア，カメルーン，ガーナ，ケニア，コンゴ，エチオピアの順になっている。
11. 首都圏の大学生を対象とした調査（大坪・相良・萩原，2003）で海外渡航経験や親しい外国人の有無を尋ねたところ，全体の59%が海外旅行経験あり，15%が1ヶ月以上の滞在経験，32%

が親しい外国人がいると回答している。しかしながら，その中でアフリカやアフリカ人との直接的な接触経験を報告した者は皆無に近かった。また，すでに行ったことのある国を含めて旅行したい国を3つまで挙げさせたところ，やはりアメリカ，イタリア，イギリス，フランスといった欧米諸国の人気が高く，それに次いでオーストラリア，中国，韓国を挙げる者が多くなっていることが判明した。アフリカに関しては，エジプト以外の国が挙がることはほとんどなく，ここでも日本人のアフリカに対する関心の低さが裏づけられた格好になっている。

影響を及ぼす可能性が高く、実際に上述の調査（大坪・相良・萩原，2003）では、それを明確に裏づける結果が示されているのである。

あるいは国・地域のイメージと人のイメージとを区別する必要があるのかもしれないが、ステレオタイプが反証される過程としてRothbart（1981）は、反証事例が増えるにつれてステレオタイプが徐々に変容することを想定した「帳簿モデル（bookkeeping model）」と極端な反証事例のインパクトを重視し、臨界点を越えた場合の劇的な変化を想定した「転向モデル（conversion model）」の2つの可能性を提示している。さらにステレオタイプから大きく逸脱した極端な事例は、例外としてサブタイプ化され、集団のステレオタイプはそのまま維持される可能性も考慮されているが、それは当該のステレオタイプが、どの程度明確か、信念に深く根差しているか、といった要因に依存する。たとえば番組出演者は、日本在住のアフリカ人としてサブタイプ化され、その言動によって現地のアフリカ人に対するステレオタイプが影響されないという可能性も考えられるが、もともとのステレオタイプの輪郭が不鮮明であれば例外という意識が生じにくいし、アフリカに対する知識や関心が乏しければ、日本在住のアフリカ人をサブタイプ化しようとする動機が強く働くこともないであろう。ただ、他の国・地域に比べてアフリカの場合は、テレビでのステレオタイプの描写と番組出演者のイメージのギャップが飛び抜けて大きいとすれば、そうしたサブタイプ化が生じる可能性も否定できない。

さて番組の視聴者が、画面に映し出される出演者の国籍や文化的背景をどの程度意識しているかは別にして、特定の国・地域に対する視聴者のイメージは、その国・地域の出演者の個々の言動やイメージを寄せ集める形で形成されるというよりも、数人の際立った個性によって強く影響される部分が大きいように思われる。その意味では、「簿記モデル」よりも「転向モデル」に近い過程が想定されることになるが、外国人出演者の中ではゾマホン・ルフインとケビン・クローンの2人が視聴者に特に強い印象を残しているのに対して、この2人に次いで発言量の多かったジャスティン・バターソンの印象はきわめて希薄なものになっているという前述の調査結果は、たいへんに示唆的である。

アフリカの民族衣装を身に着けて、どもりながら早口で話すベナン出身のゾマホンは、明治以来の伝統的な日本に対する憧れが強く、極端な欧米嫌いで現代日本の否定的側面を欧米文化の悪影響とみなし、常に教育の重要性を訴え、きわめて保守的な性道徳観を示している。一方、アメリカ出身のケビンは、容貌に関しては金髪碧眼という西洋人のステレオタイプから懸け離れているが、サングラスをかけ、腰に手を当てて流暢な日本語で常に挑戦的な話し方をしており、アメリカは正しいという自国中心的立場からの発言を強引な論理で裏づけようとすることが多い。この2人の発言や主張は、いずれも極端なものであり、真っ向から対立することが多いのだが、共に首尾一貫しており、ある種のプロトタイプとして機能しているように思われる。

こうした具体的な人物像とより抽象化された発言内容は、それぞれに異なる過程を経て、特定の国・地域や人々に対する視聴者の認識やイメージに影響を及ぼす可能性も考えられるが、多くの視聴者は、すべての放送をみているわけではないし、番組の最初から最後まで同じように注意を払ってみているわけでもない。従って、諸外国の現実認識やイメージに対する番組の影響を考察するうえでは、番組全体あるいは特定のテーマに関する分析だけでなく、際立った個性を発揮している何人かの出演者の言動に焦点を絞った質的な分析が必要となるはずであり、その点で培養分析とは必然的に異なるアプローチが求められることになる。

## 引用文献

- 有馬明恵 (2000) テレビ広告におけるジェンダー描写に対する人々の期待と評価 広告科学, 40, 70-91.
- 有馬明恵 (2001) テレビ広告におけるジェンダー描写に対する受け手の期待類型と受け手のジェンダー属性との関係 広告科学, 42, 71-85.
- FCT (市民のテレビの会) (1991) テレビが映し出す「外国」と日本の国際化 FCTテレビ診断報告 (No. 11)
- Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. (1982) Charting the mainstream: Television's contributions to political orientations. *Journal of Communication*, 32, 100-127.
- Greenberg, B.S. (1988) Some uncommon television images and the drench hypothesis. In S. Oskamp (Ed.) *Television as a social issue: Applied Social Psychology Annual (Vol. 8)* Newbury Park, CA: Sage.
- Gross, L., & Jeffries-Fox, S. (1978) What do you want to be when you grow up, little girl? In G. Tuchman, A. Daniels, & J. Benet (Eds.) *Health and home: Images of women in mass media*. New York: Oxford University Press.
- Haarmann, H. (1989) *Symbolic values of foreign language use: From the Japanese case to a general sociolinguistic perspective*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 萩原滋 (1994) 日本のテレビCMにおける外国要素の役割 慶應義塾大学新聞研究所年報, 43, 19 - 38.
- Hagiwara, S. (1998) Japanese television as a window on other cultures. *Japanese Psychological Research*, 40, 221-233.
- 萩原滋 (2002) テレビを中心とする大学生のメディア利用状況 (2001) 首都圏7大学での調査結果の報告 メディア・コミュニケーション, 52, 157-178.
- 萩原滋・御堂岡潔・中村雅子 (1987) テレビの中の外国・外国人 日本のテレビにあらわれた外国要素の内容分析 新聞学評論, 36, 57-72.
- 日吉昭彦 (1996) テレビ広告における「外国人」登場人物に関する実証的研究 テレビ広告の内容分析調査 マス・コミュニケーション研究, 51, 182-195.
- 日吉昭彦 (2001) テレビ広告のなかの「外国人」登場人物とその変化 年報社会学論集, 14, 89-101.
- 岩男寿美子 (2000) テレビドラマのメッセージ 社会心理学的分析 勁草書房
- Jackson-Beck, M. (1979) Interpersonal and mass communication in children's political socialization. *Journalism Quarterly*, 56, 48-63.
- Jeffries-Fox, S., & Signorielli, N. (1979) Television and children's conceptions about occupations. In H.S. Dordick (Ed.) *Proceedings of the sixth annual telecommunications policy research conference*. Lexington, MA : Lexington Books.
- 川竹和夫 (編著) (1983) テレビのなかの外国文化 日本放送出版協会
- 川竹和夫・杉山明子 (編著) (1996) メディアの伝える外国イメージ 圭文社
- 川竹和夫・杉山明子・原由美子・櫻井武 (編) (2000) 外国メディアの日本イメージ 11カ国調査から 学文社
- 小坂井敏晶 (1996) 異文化受容のパラドックス 朝日選書
- 国広陽子 (2001) 主婦とジェンダー：現代的主婦像の解明と展望 尚学社
- Matanabe, P. (1988) Television and black audience: Cultivating moderate perspectives on racial integration. *Journal of Communication*, 38, 21-31.
- Morgan, M. (1982) Television and adolescents' sex-role stereotypes: A longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 947-955.
- 村松泰子 (1979) テレビドラマの女性学 創拓社
- 村松泰子・ヒラリー・ゴスマン (編) (1998) メディアがつくるジェンダー：日独の男女・家族像を読みとく 新曜社
- 延島明恵 (1998) 日本のテレビ広告におけるジェンダー描写 広告科学, 36, 1-14.
- 大坪寛子・相良順子・萩原滋 (2003) 調査結果に見る『ここがへんだよ日本人』の番組視聴者像と視聴効果 メディア・コミュニケーション, 53, 77-96
- Rothbart, M. (1981) Memory processes and social beliefs. In D.L. Hamilton (Ed.) *Cognitive processes in stereotyping and intergroup behavior*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 斉藤慎一 (1992) 培養理論再考 新聞学評論, 41, 170-183.
- Shanahan, J. (1993) Television and the cultivation of environment concern: 1988-1992. In A. Hansen (Ed.) *The mass media and environmental issues*. Leicester, England: University of Leicester Press.
- 渋谷明子・萩原滋 (2002) TVステレオタイプング：『ここがへんだよ日本人』(TBS系)を素材として 外国人イメージ関連素材の内容分析 日本社会心理学会第43回大会発表論文集 (一橋大学), pp. 622-623.
- Signorielli, N. (1985) *Role portrayal and stereotyping on television: An annotated bibliography of studies relating to women, minorities, aging, sexual behavior, health, and handicaps*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Signorielli, N. (1989) Television and conceptions about sex roles: Maintaining conventionality and the status quo. *Sex Roles*, 21, 341-360.
- Signorielli, N., & Gerbner, G. (1978) The image of the elderly in prime-time television drama. *Generations*, 3, 10-11.
- 友宗由美子・原由美子・重森万紀 (2001) 日常感覚に寄り添うバラエティー番組 番組内容分析による一考察 放送研究と調査 (3月号), 12-41.

(萩原 滋 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授)

資料 番組タイトル一覧

放送日	タイトル(テーマ)	備考(スタジオのゲスト出演者, 実演の有無など)
1998年度下半期		
1998.10.21	「こんな日本人は許せない」	
1998.10.28	「日本人のここがヘン」	
1998.11.4	「ここがヘンだよ日本の親子」	
1998.11.11	「日本人に言われた許せない言葉」	
1998.11.18	「世界の人々がこの極東の島国をどうみているか」	
1998.11.25	「たけしX外国人100人」	
1998.12.2	「ここがヘンだよ日本の恋愛」	
1998.12.9	「ここがヘンだよ日本の会社」	
1998.12.16	「外国人が選んだ 98 ここがヘンだよ重大ニュース」	
1999.1.6	「新春特別企画: 世界のお祝い料理対決, 激励・抗議ランキングBEST10」	実演あり, 一部過去のVTR再放送
1999.1.13	「外国人の皆さん, これってダメですか?」	
1999.1.20	「外国人の皆さん 賛成ですか, 反対ですか?」	
1999.1.27	「日本人の大逆襲 「もう黙っていないぞ!」」	録画ミス
1999.2.3	「日本人の大逆襲 第2弾 「外国人にナンパされた女性編」」	外国人にナンパされた日本人女性
1999.2.10	「スペシャル企画第3弾 「幼児からの性教育, Yesですか? Noですか?」」	
1999.2.17	「日本人の大逆襲第3弾 「国際結婚トラブル編」」	国際結婚カップル
1999.2.24	「外国人の皆さん, あなたの国でもこんなことあるんですか? 日本の男編」	
1999.3.3	「日本人の大逆襲第4弾 「外国人お断りスペシャル」」	外国人と商売上のトラブルを経験した日本人
1999.3.10	「ここがヘンだよ日本の学校」	現役教師
1999.3.17	「ここがヘンだよ日本の女子高生」	女子高生
1999.3.24	「ここがヘンだよ外国人 ガツンと言ってやるスペシャル」	特番: 実演あり, 海外在住経験のある日本人50人vs外国人50人
1999年度上半期		
1999.4.14	「スタジオ外国人に聴けここがヘンだよ悩み相談室」	国際結婚カップル
1999.4.21	「日本人の大逆襲第5弾 「スチュワーデス編」」	スチュワーデス6名
1999.4.28	「ここがヘンだよ日本の女子高生第2弾 親の顔が見たいならお見せしましょうスペシャル」	女子高生と母親5名ずつ
1999.5.12	「緊急特別企画 ここがヘンだよアメリカ人 だから銃は無い方がいいって言ったじゃないか! スペシャル」	
1999.5.19	「子供だって外国人に黙っちゃいけないぞスペシャル」	10-15歳の子供50人vs外国人50人
1999.5.26	「日本人の大逆襲第7弾 「ここがヘンだよ日本のサラリーマン」」	日本人サラリーマン8名
1999.6.2	「緊急特別企画 コソボ紛争を考える」	アルバニア人とセルビア人
1999.6.9	「ここがヘンだよ日本の超常現象第1弾 世界の人々は信じているのかスペシャル」	実演あり
1999.6.16	「ここがヘンだよ日本のスポーツ」	マーティン・キーナートvsスポーツ関係者4名
1999.6.23	「ここがヘンだよ日本のスポーツ第2弾」	スポーツ関係者4名
1999.6.30	「99年上半期外国人たちが選んだ ここがヘンだよ重大ニュース」	
1999.7.7	「ここがヘンだよ日本の不倫」	不倫中の夫3名, 妻3名, 独身女性3名
1999.7.14	「緊急特別企画 ここがヘンだよ死に急ぐ日本人」	
1999.7.21	「日本人の大逆襲第8弾 「ツアコンダクター編」」	ツアコンダクター12名
1999.7.28	「日本人の大逆襲第9弾 「ホームステイでこんなひどいめにあいました」」	ホームステイ経験者
1999.8.11	「終戦スペシャル企画 戦争について考える」	
1999.8.18	「ここがヘンだよ外国人 日本人50人 vs 外国人50人, 史上最大のリベンジ」	特番: 外国人にナンパされた日本人女性50名, 外国人と仕事上のトラブルを経験した日本人サラリーマン・経営者50名, 同性愛者50名vs外国人50名
1999.9.1	「同性愛者50人 vs 外国人50人」	同性愛者50名vs外国人50名
1999.9.8	「ホームレスの人たち vs 外国人100人」	録画ミス
1999.9.15	「学校の先生 vs 塾の先生 vs 外国人」	録画ミス
1999.9.29	「ここがヘンだよ外国人 2時間スペシャル ここがヘンだよ中国人, 日本のスポーツ選手にも言わせろスペシャル(9:00-10:54)」	特番: 実演あり, 中国人50人vs外国人50人 外国人応援団3名(含むキーナート)vs日本人スポーツ関係者9名
1999年度下半期		
1999.10.13	「同性愛者のリベンジ第2弾 私たちの心の叫びを聞いてください」	同性愛者10名
1999.10.20	「ハマる女シリーズ第1弾」	ホストにはまるOL・風俗嬢, 現役ホスト
1999.10.27	「ハマる女シリーズ第2弾」	ブランドにはまる女性, ダイエットにはまる女性
1999.11.3	「戦争の残した物」	
1999.11.10	「ここがヘンだよ日本のポルノ」	AV女優・監督, 漫画家
1999.11.17	「ここがヘンだよ東大生」	東大生
1999.11.24	「ここがヘンだよ日本のファッション」	実演あり, 最先端ファッションの若者たち
1999.12.1	「私は国際結婚でこんなひどい目にあってしまいましたスペシャル」	国際結婚した日本人4名
1999.12.8	「今, 日本の子供たちが危ない」	
1999.12.15	「1999年重大ニュース」	
2000.1.5	「ここがヘンだよテリー伊藤」(2時間半スペシャル)	特番: 実演あり
2000.1.12	「日本女性の性について考える」	50人の日本人女性
2000.1.19	「ここがムダだよ日本の社会」	

2000.1.26	「学校に行かない子どもたちを考える」	不登校児7名
2000.2.2	「日本人の逆襲・外国人の食生活ここがヘン」	実演あり
2000.2.9	「ここがヘンだよ日本の老人」	老人
2000.2.16	「国際結婚は良いのか、悪いのか」	
2000.2.23	「日本のひずみを考える、夜の街で働く女子大生」	水商売をする女子大生
2000.3.1	「ここが絶対ムダだよ日本の社会」	
2000.3.8	特別企画「日本と韓国の関係を考える」	韓国人50人vs日本人・外国人50人
2000.3.15	「いじめと闘う子供たち」	いじめられっ子
2000.3.29	「ここがヘンだよアフリカ人」(9:00-10:53)	特番:実演あり
2000年度上半期		
2000.4.12	緊急特別企画「少年犯罪を考える」	暴走族,チーマー
2000.4.19	「霊能者・催眠術師(日本の超常現象 第2弾)」	実演あり
2000.4.26	「いじめと闘う子供たち(第2弾前編)」	いじめられっ子,現役教師
2000.5.3	「いじめと闘う子供たち(第2弾後編):文部省に物申す」	いじめられっ子,現役教師,文部省役人
2000.5.10	「ストーカー犯罪を考える」	ストーカー5名
2000.5.17	「ストーカー犯罪を考える 第2弾」	ストーカー5名
2000.5.24	「第1回お国自慢No1決定戦」	実演あり
2000.5.31	多発する少年犯罪	中学生10人
2000.6.7	「ここがヘンだよ関西人」	関西人
2000.6.14	「ここがヘンだよ日本の超常現象 第3弾」	実演あり
2000.6.28	「第1回外国人クイズ選手権」	実演あり
2000.7.5	「いじめと闘う いじめられっ子 vs いじめっ子 前編」	いじめっ子vsいじめられっ子
2000.7.12	「いじめと闘う いじめられっ子 vs いじめっ子 後編」	いじめっ子vsいじめられっ子
2000.7.19	「外国人が選ぶ日本の上半期重大ニュース」	
2000.7.26	「ストーカー犯罪を考える 第3弾」	ストーカー経験者と被害者
2000.8.2	「17歳の少年少女が人を殺したいと思う瞬間」	17才50名
2000.8.9	「日本の霊能者」	録画ミス
2000.8.16	「日本の少年達はなぜ人を殺してしまうのか」	犯罪少年と同世代の男女50人
2000.8.23	「宿敵対決 関西人対関東人」	関東と関西のおばちゃん,ホスト,女子高生,巨人ファンと阪神ファン
2000.9.6	「これで大丈夫?日本人の学力」	実演あり,大学生・専門学校生50人
2000.9.13	「ここがヘンだよ日本のスポーツ」	実演あり,マーティー・キーナートvsスポーツ関係者8名
2000年度下半期		
2000.10.4	「外国人に告ぐ!そんなことしていいのかSPECIAL」	特番
2000.10.11	「ここがヘンだよシドニーオリンピック」	スポーツ関係者6名
2000.10.18	「働かない男たち ヒモについて考える」	働かない男,ヒモと付き合っている女性2名
2000.10.25	「女性の権利を考える第1弾 妊娠中絶」	中絶経験のある女性
2000.11.1	「いじめと闘う第6弾」	いじめられっ子と親
2000.11.8	「ここがヘンだよ日本の病院」	医師,看護師(婦)
2000.11.15	「ここがヘンだよ日本の病院第2弾」	医師,看護師(婦)
2000.11.22	「特別企画 ここがヘンだよ日本のマニア」	実演あり,各種マニア
2000.11.29	「外国人怒りの現場」	
2000.12.6	「ここがヘンだよ日本のプロ野球」	マーティー・キーナートvsプロ野球関係者7名
2000.12.13	「ここがヘンだよ日本の公共事業」	
2001.1.3	「ここがスゴイ日本人 新世紀誉め殺しスペシャル」	特番:実演あり
2001.1.10	「世界の動物虐待を考える」	
2001.1.17	「男と女のトラブルについて考える」	愛人,セクハラ被害者,冤罪被害者の男
2001.1.24	「子供達への虐待」	虐待されたことのある子供と親
2001.1.31	「スペシャル企画・日本の新成人,世界各国自慢料理」	実演あり,新成人
2001.2.7	「日本の若者は果たして国際になれるのか/太っている人々の主張」	特番:50名の若者,太った人
2001.2.21	「日本では絶対にお目にかかれない映像SPECIAL」	
2001.2.28	「外国人事件簿2001」	
2001.3.7	「子供達への虐待 第2弾」	教護院での虐待経験者,虐待する母親
2001.3.14	「ここがヘンだよキャバクラ人間模様」	キャバクラ嬢50名,キャバクラ好きの男
2001.3.28	「ふくやかな人の大逆襲/続キャバクラ人間模様」	特番:実演あり,キャバクラ嬢,キャバクラ好きの男,太った人50人,太った女が好きな男
2001年度上半期		
2001.4.12	「オンナの顔」	実演あり,顔にコンプレックスのある女性,美を売物にする女性
2002.4.19	「潜入!ニッポン裏社会 外国人犯罪24時」	
2001.4.26	「ここがヘンだよ 結婚したい女たち」	実演あり,結婚願望の強い50人の女性
2001.5.3	「世界のかawaiiそうな子供達」	小中学生50人
2001.5.10	「ダメな女スペシャル」	片付けられない女,借金をやめられない女,セックスなしでいられない女
2001.5.17	「これで大丈夫か!日本の子供達」	
2001.5.24	「オンナの顔 第2弾」	自称ブスvs自称美人
2001.5.31	「日本の人妻」	人妻50人,舅,姑
2001.6.7	「ここがヘンだよ日本のプロ野球」	マーティー・キーナート,二宮清純,玉木正之,プロ野球関係者4名,元関取2名
2001.6.14	「21世紀ニッポン夫婦の大問題」	問題を抱える夫婦3組
2001.6.21	「ハゲの男達の叫び声を聞け」	実演あり,ハゲの男50人
2001.6.28	「過激大乱闘大暴動特集」	110回記念と銘打って全編過去のVTR再放送

『ここがヘンだよ日本人』：  
分析枠組と番組の特質

2001.7.5	「オンナの顔 第3弾」	15分拡大スペシャル：ブス50人vs自称美人
2001.7.12	「霊能者 50人」	実演あり
2001.7.19	「徹底検証 霊能者に霊能力はあるのか」	実演あり
2001.8.2	「太っている人々の熱き主張 第3弾 真夏の恋愛スペシャル」	デブ50人vsダイエットに成功した人達
2001.8.16	「在日外国人に学ぼう！究極の節約術 BEST10」	
2001.8.23	「日本の霊能力者 悪霊 VS 霊能力者」	実演あり
2001.8.30	「女は男のうえに立てるのか SPECIAL」	女社長vs男性社員50人
2001.9.6	「100万円争奪！外国人対抗大運動会」	実演あり
2001.9.13	「ここがナゾだよアントニオ猪木」	実演あり
2001.9.20	「中国最強の霊能力者 VS 日本の霊能力者」	実演あり
2001年度下半期		
2001.10.4	「霊能力スペシャル/日本人輸出ダイエット企画/同時多発テロ」	特番：実演あり
2001.10.18	「オンナの顔 第4弾 自称ブス VS 整形美人」	実演あり，ブス50人vs整形した女性とボーイフレンド
2001.10.25	「心の病を考える 第1弾 PTSDという名の新しい病」	PTSD患者
2001.11.1	「気功対決 世界の気功師 vs 大槻教授」	実演あり
2001.11.8	「空爆から1ヶ月...番組外国人が緊急帰国」	
2001.11.15	「日本の危機管理を考える」	
2001.11.22	「世界の気功師 vs 大槻教授」	実演あり
2001.11.29	「炎の第2弾 在日外国人に学ぼう!究極の節約術 BEST10」	実演あり
2001.12.6	「障害者の悲痛な叫び」	車椅子5名，視覚障害者3名
2001.12.13	「倒産寸前社長 VS もうけすぎ社長」	数人の社長
2002.1.3	「ワールドカップ記念...大勢の外国人がやって来る」	特番
2002.1.10	「在日外国人に学ぼう 究極の健康法」	
2002.1.17	「3周年記念 日本人は本当に変わったのか Special」	一部過去のVTR再放送
2002.1.24	「沖縄を助けてください Special」	沖縄人50名
2002.1.31	「日本のバリアフリー 第2弾」	視覚障害者，ホーキング青山
2002.2.7	「身体障害者の暮らしやすい社会とは」	視覚障害者，ホーキング青山
2002.2.14	「ここへんサミット2002 俺達は怒っているんだスペシャル 日本人の大逆襲」	過去の番組出演者50人
2002.2.21	「ここへんサミット2002 俺達は怒っているんだスペシャル」	過去の番組出演者50人
2002.2.28	「日本の立派な女子大生たち」	実演あり，女子大生50人
2002.3.7	「ここがヘンだよ日本のテレビ」	
2002.3.14	「テレビでこんなこと言っちゃって大丈夫なのか Special」	最終回，総集編，過去のVTR再放送